

水辺の 生物



モクズガニ

十脚目イワガニ科

写真提供：神奈川県水産技術センター内水面試験場

モクズガニは、甲羅の幅が 50~60mm 程度の中型のカニで、80mm を超える巨体もいる。両方のハサミの外側に柔らかい毛が密生し、甲は縦に長い六角形で、側縁部にノコギリの歯のような鋭いトゲが 3 対ある。全体的に濃い緑がかった、泥のような暗褐色をしている。チュウゴクモクズガニ(上海ガニ)は近縁種。

日本全域の河川、汽水域、沿岸などに生息し、川にすむカニとしては最大。主として石の下や隙間を利用し、カワナやミミズ、水生昆虫などを捕食するほか、川底のデトリタス(枯死植物の破片や微生物)も食べる雑食性。夜行性で歩行能力が強く、妨げる物がなければかなり上流まで遡上する。

秋の 9~10 月頃、産卵のため川を下る。モクズガニの体液は、海水とほぼ同じ程度の塩分濃度のため、川に入ってから約 1 週間、塩分濃度の調節を行い、海で交尾して幼生を海に放つ。メスは最初に約 100 万粒、2 回目にその半分の卵を産む。一度川を下ったカニはそこで一生を終える。

稚ガニは河口域で幼ガニに成長し、川の遡上を始める。3 年で川を下りる個体もいるが、長期間、川に留まるものもいる。

食用として味が良く、河川漁業ではアユとともに重要な水産資源だが、乱獲や河川環境の変化などにより、近年資源量が減少している。カニの隠れ家となるような間隙を多くつくることが重要である。

取材協力：高木嘉雄氏

参考文献：『水辺の小わざ』山口県土木建築部河川課 2007 年

『原色日本大型甲殻類図鑑(Ⅱ)』三宅貞祥著 保育社 1983 年

神奈川県水産技術センター・ホームページ

島根県水産技術センター・ホームページ

これまでに紹介した「水辺の生物」のうち主なものを水資源機構ホームページに掲載しています
(トップページ右側「水辺の生物」をクリック)